

# 括り猿

—— サルを題材にした日本の家紋 ——

小 川 春 子<sup>1</sup>

小 川 秀 司<sup>2</sup>

## 要旨

サルを題材にした家紋である猿紋は、植物の家紋と比べて非常に少なく、「<sup>く</sup>括り猿」や「三つ括り猿」など数種類しか存在しない。また猿紋のすべては円や弧からなる幾何学的で単純な意匠（図柄，デザイン）である。「括り猿」という名称は庚申堂に吊り下げられている布小物の「括り猿」（サルの四肢に見立てた布の四隅が括られている）に由来するが，江戸時代にはそれがさらに単純な図にされて家紋や衣服などの文様に使われていた。猿田彦神社と歌舞伎の市川猿之助の替紋には猿紋が使われてきたが，公家や武家が猿紋を定紋として使っていた記録は見当たらない。ヒトによく似た写実的な意匠のニホンザルは家紋には使われにくかったために，猿紋は抽象的な意匠となったのかもしれない。

キーワード：家紋，サル，猿紋，<sup>く</sup>括り猿，題材，幾何学的模様，三つ括り猿

## はじめに

家紋（紋所，定紋）は氏族や「家」を表す日本の紋章であり，以下のように広まってきた（丹羽，1986；奥平，1983；高澤，2008）。

家紋は平安時代に公家が自分（達）の物であることを示すために牛車や調度品などに美しい紋様をつけたことから始まった。鎌倉時代には武士が家紋を旗につけて，戦場で敵と味方を見分けするための目印にした。戦乱の時代が終わって江戸時代（1603－1867年）に入ると，武家は自分の

---

1：金城学院大学大学院文学研究科大学院生

2：中京大学教養教育研究院教授

「家」の印として家紋をあしらった調度品や衣服を所持するようになった。幕府に届出をして公式の場で用いていた定紋（正紋、本紋）とは別に、定紋を輪郭で囲ったり新たな紋様を考案したりして替紋を作り、非公式の場ではそちらを用いることもあったらしい。幕末から明治時代には、庶民の間でも家紋が流行り、多くの人が家紋を用いるようになった。現在では、自分の家の家紋を知らない人もいるが、多くの家に家紋は伝えられており、冠婚葬祭の場では家紋が入った礼服を着用することがある。家紋をロゴとして使っている会社もあり、新しいオリジナルの家紋を作って楽しむ人達も増えている。

家紋の意匠の基本形は約400種類であるが、丸や角で囲ったり、基本形を組み合わせたり変形したりして、江戸時代には1,000種類程度であった家紋の種類は、現在では20,000種類を超えている（丹羽，1986；高澤，2008）。西洋の紋章とは異なり、使用する題材や構成要素の配置に厳格な規則は存在しない（奥平，1983）。幾何学図形，文字，月や雲などの自然物，身のまわりの人工物，動植物など，多様な題材が家紋には使われている（Ikeda et al., 2010；奥平，1983）。

本報では、サルを題材とした家紋に焦点を当て、その意匠の種類数や特徴について報告する。

## 方法

「みんなの知識ちょっと便利帳」の「家紋の図鑑9,000」<<https://www.benricho.org/kamon/>>に載っている11,184種類の家紋について（みんなの知識委員会，2022），そこで使われている331の分類群に従って，2021年12月23日に家紋の数を数え，それらの名称と意匠（図柄）を整理した。

「日本の家紋データ集2000種 かもんかもん Ver. 2 Vol. 1 & Vol. 2」（システムプロダクト，2010）に載っている4,000種類の家紋について，<<https://www.e-spc.co.jp/kamon2/kamonserch.htm>>の検索機能を用いて，2021年12月27日に家紋の数を数え，それらの名称と意匠（図柄）を整理した。

また，「日本の家紋—Japanese Family Crests—」（安田，2004）に載っている4,560種類の家紋と，「家紋デザイン素材集」（安田，2010）に載っている2,352種類の家紋を見て，サルを題材とした家紋を探した。

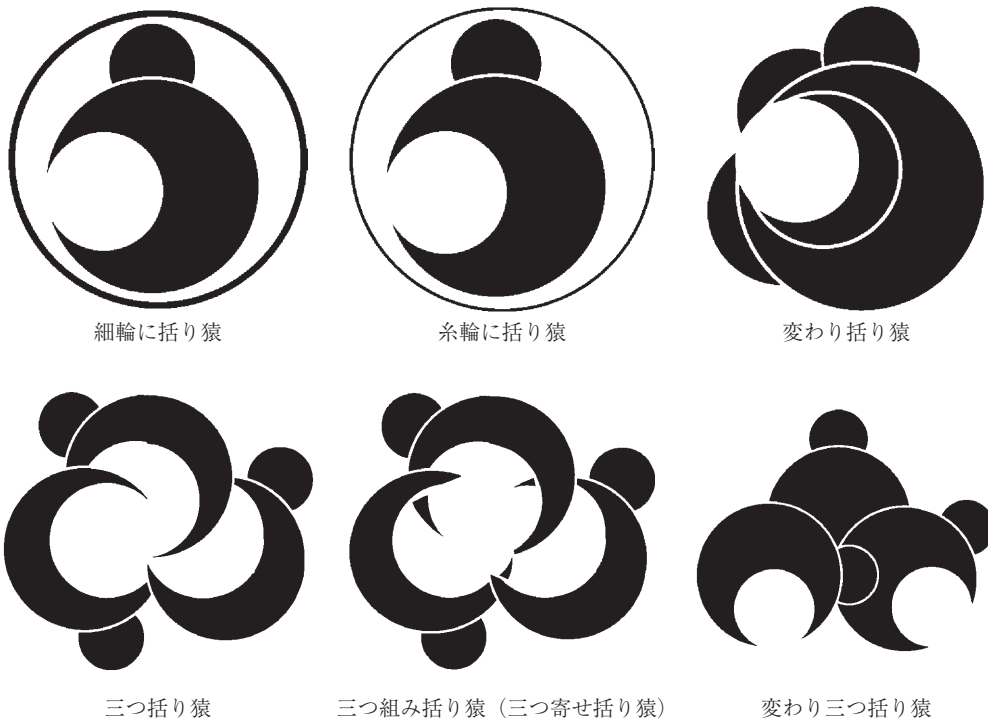
なお，各家紋につけられた名称は図鑑によって若干異なるが，本報では原則として上記「家紋の図鑑9,000」に記載された名称を使用する。サルを題材とした家紋は「猿紋」と総称する。

## 結果

### 家紋の題材

「家紋の図鑑9,000」の「猿」という分類群内に，猿紋は計6種類存在し，それらの名称は「細輪に括り猿」「糸輪に括り猿」「変わり括り猿」「三つ括り猿」「三つ組み括り猿（三つ寄せ括り猿）」

図1. サルを題材にした家紋



「変わり三つ括り猿」だった（図1）。

シカは「鹿」という分類群内の2種類「鹿に楓」と「夫婦鹿」に使われ、イノシシは「猪」という分類群内の1種類「丸に猪」で使われていた。ウマは「馬」という分類群内の26種類、ウサギは「兎」という分類群内の13種類、コウモリは「蝙蝠」という分類群内の3種類に使われていた。「獅子」という分類群内にライオン（あるいはライオンに似た想像上の動物）が使われた家紋が9種類あった。従って哺乳類は、生物の分類では種、属、科、目などに該当する7つの分類群にわたって計60種類の家紋に使われていた（ただしヒトは除く。以下同様）。鳥類は、ガン（雁金）やスズメ（雀）など15の分類群にわたって計353種類の家紋に使われていた。爬虫類は、カメ（亀）という分類群内で31種類の家紋に使われていた。両生類と魚類は家紋に使われていなかった。これらに龍が使われていた29種類の家紋を加えると、脊椎動物は24の分類群にわたって計473種類の家紋に使われていた。

昆虫はチョウ（蝶）が196種類、トンボ（蜻蛉）が7種類に使われ、甲殻類はエビ（海老）が21種類、カニ（蟹）が11種類の家紋に使われており、ムカデ（百足）が7種類の家紋に使われていたので、節足動物は、5つの分類群にわたって計242種類の家紋に使われていた。貝は、ハマグリ（蛤）など5つの分類群にわたって計103種類の家紋に使われていた。

以上を集計すると、動物は、34の分類群にわたり計818種類の家紋に使われていた。植物は、89の分類群にわたり計5,108種類もの家紋に使われていた。菌類は、家紋に使われていなかった。

なお、動植物が別の題材と組み合わせられて使われている場合には、その家紋は上記以外の分類群に入れられていることがあり得る。しかし、検索機能を用いて調べても、直接家紋を見て確認しても、サルは上記以外の分類群には使われていなかった。

「日本の家紋データ集2000種 かもんかもん Ver. 2 Vol. 1 & Vol. 2」を「猿」という言葉で検索すると、猿紋は計4種類存在し、それらの名称は「細輪に括り猿」「三つ括り猿」「三つ括り猿2」「変わり三つ括り猿」だった。「三つ括り猿2」の意匠は「家紋の図鑑9,000」の「三つ組み括り猿(三つ寄せ括り猿)」と同一だった。

「日本の家紋—Japanese Family Crests—」と「家紋デザイン素材集」には、サルを題材とした家紋は載っていないかった。

### 猿紋の意匠

猿紋はどれも幾何学的な意匠であり、一見したところではサルを題材としているとはわからないほどであった(図1)。すべての猿紋は、円と円弧を用いて、円を小さな円でくりぬいた三日月型の組み合わせのみで構成されていた。1頭のサルを表している図は、どの図鑑でも「括り猿」と称されていた(みんなの知識委員会, 2022; 丹羽, 1986; システムプロダクト, 2010; 高澤, 2008)。「括り猿」は、座った姿勢のサルを横から眺めた状態が表現されており、三日月型の尖った両端部分がそれぞれ前肢と後肢を示し、三日月型の上に頭部を表す半円が乗っている。他の猿紋はどれも、この「括り猿」を囲ったり変形したり、「括り猿」を3頭組み合わせたりした意匠だった。「三つ括り猿」と「三つ組み括り猿(三つ寄せ括り猿)」は、3頭のサルが向かい合って手足を絡ませた状態が描かれている。「変わり三つ括り猿」は、3頭のサルが背中側を向けあって、それぞれは外側を向いている。

サル以外の動物を題材にした家紋には、写実的な描写をした複雑な意匠も含まれていた(図2)。

## 考察

### 家紋の題材となっている動物

日本にヒト以外の霊長類は、日本の固有種であるニホンザル(*Macaca fuscata*)しか生息していない。従って猿紋に描かれたサルはニホンザルだと推測される。ニホンザルと同様に考えると、日本列島の本州、四国、九州に生息する中大型の主な野生哺乳類のうち、ニホンジカ(*Cervus nippon*)は2種類の家紋に、イノシシ(*Sus scrofa*)は1種類の家紋に使われていたが、ツキノ

図2. サル以外の動物を題材にした家紋の例



「日本の家紋データ集2000種 かもんかもん Ver. 2 Vol. 1」より。

ワグマ (*Ursus thibetanus*), ニホンカモシカ (*Capricornis crispus*), ホンドキツネ (*Vulpes vulpes japonica*), タヌキ (*Nyctereutes procyonoides*) は家紋には使われていなかった。他の野生哺乳類を題材にした家紋に比べて猿紋の種類が比較的多いことから、日本人にとってニホンザルが身近な動物であったことが伺える。

しかしながら、猿紋の種類は、哺乳類の中だけで比べてもウマとウサギを題材にした家紋より少なく、植物を題材にした家紋と比べると圧倒的に少なかった。

他の動物を題材にした家紋は、図2のように写実的な描写をした複雑な意匠も多かった。それに対して猿紋は、すべてが「括り猿」を要素とした幾何学的で単純な模様である点も特異的だった。

以下では、「括り猿」及び「三つ括り猿」がどのように使用されてきたのかについて考察する。

### 猿紋の使用例

個人によって近年新しく作られた場合は除いて、猿紋が現在まで伝統的に使用されてきたことが確認できたのは、次の2例のみである。

(1) 猿田彦神社 (別名: 山ノ内庚申<sup>やまのうちにこうしん</sup>) は、猿田彦を祀神としており、「神鏡に三つ盛括り猿」を神紋 (神社の家紋) としている。三重県伊勢市にある総本社では、「神鏡に三つ盛括り猿」を御朱印状に押印したり、「三つ括り猿」を瓦に刻んだり、「尻合わせ三つ括り猿」を提灯などにしている (森本, 2016)。

(2) 歌舞伎の名跡である市川猿之助は、「三つ猿 (三つ括り猿)」を替紋とし、屋号である澤瀉屋ではこの替紋をよく用いている。生家が薬草を使う薬屋であったため、定紋は水辺の植物であるオモダカ (*Sagittaria trifoli*) を題材とした「澤瀉」であるが、替紋として猿紋も初代市川猿之助 (1855-1922年) より代々使われてきた (山村, 1997)。

図3. 家紋に「括り猿」を入れた小袖が描かれている絵画



ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館所蔵 石川豊雅「風流十二月 五月」。作品左にいる後ろ姿の肩揚げをした少年が着ている小袖の紋の位置に「括り猿」がついている。

江戸時代中期（1700–1800年頃）には、「括り猿」を家紋とした衣服を着ていた人もいたらしい。例えばヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）所蔵の石川豊雅「風流十二月 五月」には、少年が着ている小袖の紋の位置に「括り猿」がついているのが描かれている（石川、1764–1772）（図3）。

ただし、公家や武家が猿紋を定紋として実際に使っていたことを示す資料は見つからなかった。

### 布小物の「括り猿」

実は、家紋の名称と同じく「括り猿」と呼ばれる物が、京都市の八坂庚申堂には飾られている（図4）。それは、つるし飾りのように数種類の色の布で作られた縦6 cm 横6 cm 高さ7 cm 程度のお手玉のような布小物である。綿を詰めて丸くした布をサルの頭、別の四角い布に綿を詰めたものを胴体として、その四隅を四肢と見立てて縫い寄せてある。四隅を一ヶ所に集めて括ってあるのは、欲に走ろうとする心を戒めるためと言われている。購入した布小物の「括り猿」に、絵馬のように願いごとを書き込んでお堂に吊るす。幸運を呼び寄せる装飾品として、鞆などにつけられる1 cm 程度の「括り猿」も販売されている。



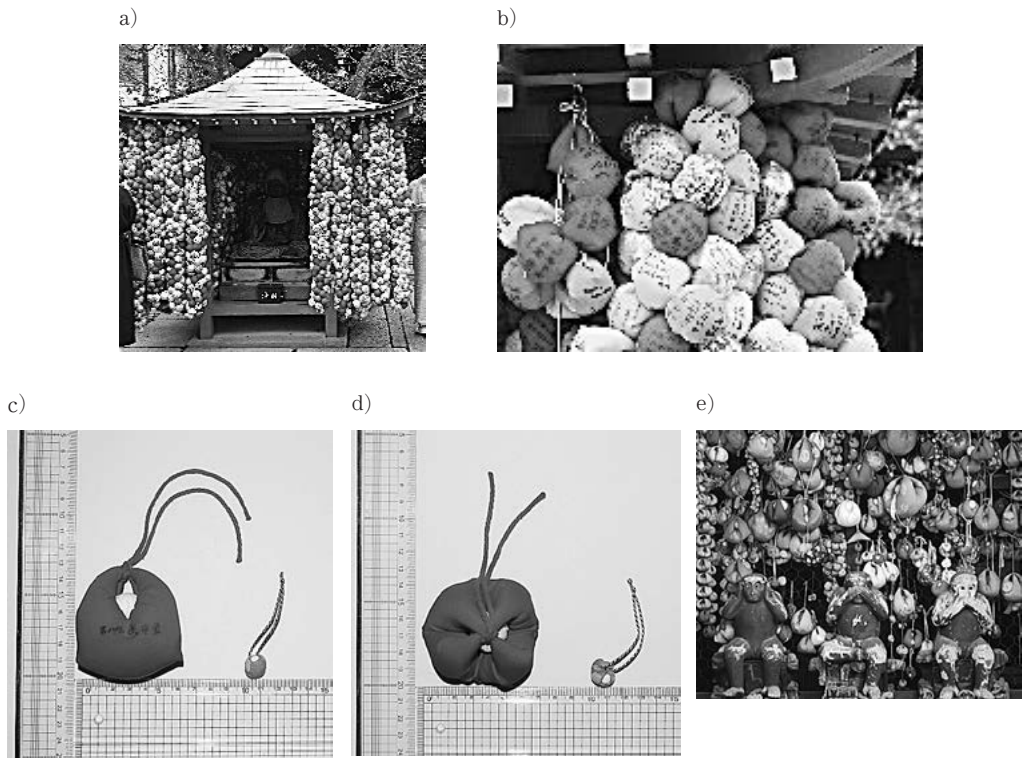
また、奈良市では、京都市の物とほぼ同じ布小物を、家の中に災難が入ってこないようにと、軒先に吊り下げている民家も見られる。災厄を代わりに引き受けてくれることから、「身代わり申(猿)」「庚申さん」と呼ばれている。

これらと同じ形の布小物は、江戸時代から縁起物として店などに飾られてきた（山村，1997）。当時の浮世絵で、背景に遊女屋の縁起棚が描かれた作品があり、そこには折り鶴やおかめの面と共に「括り猿」が吊り下げられている（歌川，1802）。「括り」という言葉が客を「括りつける」という意味に通じることから、商売の縁起物として使われていたらしい。こうした「括り猿」は、子供の玩具としても使われていた（喜多村，1830）。

### 衣服にあしらわれた「括り猿文様」

上記の縁起物あるいは玩具としての「括り猿」は、1700年代には図案化され、装飾品や小物の

図4．八坂庚申堂の布小物の「括り猿」



a) 八坂庚申堂のお堂に吊り下げられた「括り猿」。b) 「括り猿」には願いごとが書き込まれている。c) 横から見た「括り猿」。画面左が通常サイズ。画面右が小さいサイズ。d) 上から見た「括り猿」。画面左が通常サイズ。画面右が小さいサイズ。e) 本堂には「括り猿」と共に三猿（見ざる・言わざる・聞かざる）も飾られている。2022年に撮影。

題材として扱われていた(式亭, 1809)。図案化された「括り猿」が衣服につけられたものは「括り猿文様」と呼ばれる。

「括り猿文様」について山村(1997)は以下のように報告している。当時のファッション・カタログ的存在であった小袖雛形本には、「括り猿文様」が載った小袖の図版が4種類残されている(山辺, 1974)。それらの呼称は「まり猿」「まもり猿」「括り猿」と一定していないが、どの意匠も頭部を円または半円で表し首から下を三日月型で表した幾何学的な模様である点で、家紋の「括り猿」と同じである。また、江戸時代中期の浮世絵には、幾つもの「括り猿」がちりばめられた衣服を来た人物が描かれている。例えば鈴木春信作の「子供神楽」では、中央の太鼓を叩く少年の衣服に、猿廻し風の男の顔のまわりに「括り猿」があしらわれている(鈴木, 1768)。山村(1997)は、「括り猿文様」を着た人達を、(1)少年、(2)歌舞伎役者、(3)猿廻し、(4)遊里の女性に分類し、その意味や目的を、(1)玩具としての「括り猿」を衣服に描いて子供らしさを表すため、(2)猿に関連した芝居の筋立てを示したり、役者のトレードマークとするため、(3)猿に関連した職業であることを示すため、(4)客商売の縁起物とするためと考察している。「江戸時代の人々にとって括り猿文様こそがサルを最も好ましくデザイン化した文様であり、人々に広く認識されていたと考えることが可能であろう」(山村, 1997)。資料への出現頻度から推定すると、小袖雛形本では1703(元禄16)年刊行の「花鳥雛形」、1705(宝永2)年刊行の「當世模様 委細ひいなかた」、1728(宝暦8)年刊行の「雛形接穂櫻」の「子供遊」、1800(寛政12)年刊行の「新雛形 千歳袖」に、浮世絵によると1760年代から1830年代にかけて「括り猿」は文様に頻繁に使われた。なお「三つ括り猿」が文様に使われていた例は見つからなかった。

### 家紋の「括り猿」の意味

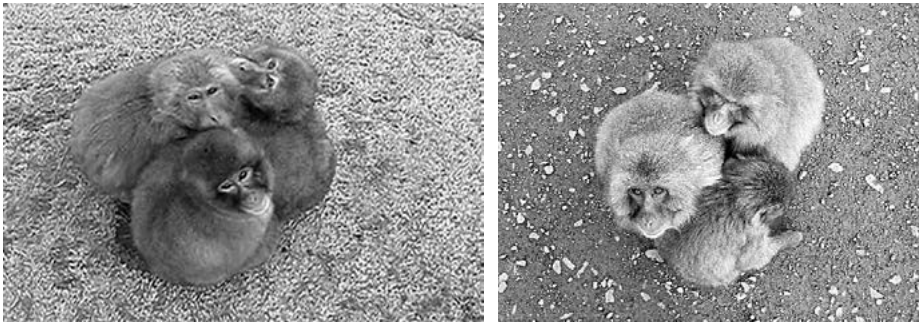
家紋の「括り猿」と「括り猿文様」のどちらが先に生まれたかは定かではないが、サルを題材にした布小物の「括り猿」をさらに単純な図としたものが、家紋の「括り猿」であり「括り猿文様」であろう。

しかしながら、家紋の「括り猿」や「括り猿文様」に、八坂庚申堂の「括り猿」と同じように「括られた猿」という意味が込められているのかについては疑問が持たれる。家紋に描かれたサルは「括り猿」と称されているが、あくまで単純で幾何学的な意匠であり、それを見て手足を括られたサルの姿を想像するのは難しい。また、八坂庚申堂の「括り猿」は布の四隅の真ん中に頭部が位置するが、家紋の「括り猿」では手足を示す三日月の窪んだ部分に頭部が位置するようには描かれていないという違いもある。

「三つ括り猿」ではサルが互いに手足を括りあっていると見えないこともないが、この体の向きはむしろ3頭のニホンザルが暖をとるために「さるだんご」を作っている様子を彷彿させる(Ogawa & Wada, 2011)(図5)。



図5. ニホンザル3頭による「さるだんご」



京都市の「嵐山モンキーパークいわたやま」にて2002年と2006年に撮影。

なお、「三つ括り猿」のように3頭のサルと言えば想起されるのが、「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿である。「塔・縁起・文献・掛軸等総て庚申に三猿が習合する年代は江戸時代の初期である」(小花波, 1973)。八坂庚申堂にも三猿があることから、当時の人々にとって庚申信仰の猿と三猿が習合した状態で認識されていたことが伺える。しかし家紋には3つの要素を合わせた意匠が多いので、「三つ括り猿」が三猿を表したもののかは不明である。

いずれにせよ江戸時代の人々は家紋の「括り猿」を単にサルを表象した意匠として認識し、「括り猿」という名称のみがその由来を留めることになったのかもしれない。布小物の「括り猿」、家紋の「括り猿」、「括り猿文様」の発生についての詳細な時代考察は今後の課題としたい。

#### 猿紋は何故少なく幾何学的意匠なのか

猿紋は種類数が少なく、猿紋を伝統的に使用していることが確認できた例も少数に限られた。四足動物は、家紋に限らず、衣服などの文様にもあまり使われてこなかった(山村, 1997)。四足動物の使用が少ないのには、平安時代以降の肉食の忌避や穢れの影響が影響しているのかもしれない(大館, 2013)。サルもその例外ではないだろう。さらに、様々な動物の中でもサルが家紋や文様にあまり使われていないのは、サルがヒトによく似ているからかもしれない。ダーウィンの進化論とそれに相反するキリスト教の思想は、江戸時代以前の人々にはまだ多くの影響を与えてはいなかった(溝口, 2010)。だが、輪廻転生の考え方は日本人にとって古くから現代まで馴染み深いものである(湯本, 2011)。家紋は自分達が帰属する「家」を示し、その家の由来や先祖の状況を連想させる。故にサルがヒトと近い存在であるという認識は、サルを家紋や文様に使用することを躊躇させる一因となったのかもしれない。猿紋は、種類数と使用例が少ないだけでなく、すべてが抽象的な意匠である点も特異的である。浮世絵の中には、登場人物が「括り猿文様」の衣服を着ている例はあるのに対し、他の形でサルを表した文様は見つからなかった(山村, 1997)。写実的なサルの意匠を使うことは、家紋でも避けられた可能性は十分にあるだろう。

写実的な意匠の括られたサルでは装飾模様としては好まれにくかったがために猿紋には幾何学的な意匠が採用され、抽象的な意匠であったからこそ「括り猿」は今日まで家紋に使われてきたのかもしれない。

## 謝辞

ウェブサイト「みんなの知識ちょっと便利帳」の「家紋の図鑑9,000」の作成者を初めとする家紋図鑑の編著者及び出版社、図鑑作成に有形無形の貢献したであろう家紋愛好家の皆さん、取材にご協力いただいた八坂庚申堂の方々、原稿に貴重なコメントをくださった金城学院大学文学部の龍澤彩教授に感謝します。

## 引用文献・引用資料

- Ikeda, M., Miike, N., Osa, A., & Miike, H. (2010) Classification of the design elements inside Kamon, the Japanese family crest, using image processing. Proceedings of the third international workshop on Kansei, pp. 154 – 157.
- 石川豊雅 (1764–1772)「風流十二月 五月」ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 <<https://collections.vam.ac.uk/item/O422045/boys-festival-the-fifth-month-woodblock-print-ishikawa-toyomasa/>>
- 喜多村信節 (1830)「嬉遊笑覧」名著刊行会 p. 170.
- 小花波平六 (1973)「庚申信仰と三猿」日本民族学会第11回研究大会報告要旨 民族学研究37 : 312–313.
- みんなの知識委員会(作成) (2022)「みんなの知識ちょっと便利帳—家紋の図鑑9,000—」<<https://www.benricho.org/kamon/>>
- 溝口元 (2010)「日本におけるダーウィンの受容と影響」特集ダーウィン生誕200年—その歴史的・現代的意義— 学術の動向15(3) : 48–57.
- 森本勇矢 (2016)「家紋研究家が行く！ 京都御朱印巡り 右京区の朱印：猿田彦神社(山ノ内庚申)」<<https://ameblo.jp/devilark666/entry-12186920287.html>>
- 丹羽基二 (編著)、樋口清之 (監修) (1986)「家紋大図鑑」秋田書店
- Ogawa, H. & Wada, K. (2011) Shape of, body direction in, huddles of Japanese macaques (*Macaca fuscata*) in Arashiyama, Japan. Primates, 52(3): 229–235.
- 大館大學 (2013)「有職文様における意匠生物の特徴 (予察報告) : 四足動物の忌避と在来種の敬遠」生き物文化誌学会第11回学術大会東京大会 生き物文化誌学会創立10周年記念プログラム要旨集 pp. 30–31.
- 奥平志づ江 (1983)「日本の家紋」家政研究 15 : 1–4.
- 式亭三馬 (1809)「浮世風呂二ノ下」日本古典文学大系 第63巻 浮世風呂 岩波書店 p. 166.
- 鈴木春信 (1768)「子供神楽」浮世絵聚花18 ポストン美術館 II 小学館
- システムプロダクト (株) (2010)「日本の家紋データ集2000種 かもんかもん Ver. 2 Vol. 1 & Vol. 2」
- 高澤等 (著)、千鹿野茂 (監修) (2008)「家紋の事典」東京堂出版
- 歌川豊国 (1802)「繪本時世粧 坤」世日本風俗絵本集成 臨川書店
- 山村明子 (1997)「江戸服飾の括り猿文様」一宮女子短期大学紀要 36 : 203–222.
- 山辺知行 (監修) (1974)「小袖模様雛形本集成」学習研究社 文彩社
- 安田英樹 (発行) 青幻舎第二編集室 (編) (2004)「日本の家紋—Japanese Family Crests—」青幻舎
- 安田洋子 (2010)「家紋デザイン素材集 (CD-ROM 付)」青幻舎
- 湯本貴和 (2011) 輪廻転生と殺生—ボタンと日本の場合— ヒマラヤ学誌 12 : 158–162.